



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

お姫さま —16歳—(前編)



松岡園子

回っている扇風機の羽に向けて、あーと言ってみる。こんなことをして、子どもっぽいかな。まだ祖父と祖母がいた頃に戻ったような気がする。宇宙人みたいな声が、明るくも寂しくも聞こえる。変わってないな。いや、変わりすぎたのかな。

夏子の部屋では祖父と祖母のタンスが仲良く陣取り、中の物も、亡くなった時のままだ。ゆりは、椅子の上に立ち上がって天袋の引き戸を開けた。部屋の天井付近にこもった熱気が、肌にまとわりつく。さっき、廊下の電気が点かなくて電球をはめ直したりしていたからか、頭からこめかみまで何筋も汗が流れてきたのを感じる。

「わ、電球の箱が奥に行っちゃってしまってるわ」

孫の手があったら、それを引き寄せられる。

「お母ちゃん、孫の手、取ってくれへん？」

椅子の上から頼む。受け取った孫の手で電球の箱を引き寄せながら、お母ちゃんも変わったなと嬉しさが湧いてくる。以前の夏子はそこにいても「そこにいなかった」。

ゆりが夏子の変化に気づいたのは、中学生になる前の春休み頃のことだった。一緒に住んでいた祖父が亡くなり、祖母が入院して2人暮らしになったはずなのに、誰もいない台所でひとり話す夏子に恐怖を感じた。夏子は身のまわりのことができなくなっていき、ゆりが話しかけても独り言に夢中だった。でもそれが病気なのか何なのか、わからない。心配した親戚は、ゆりを児童養護施設に入所させたが、ゆりは説明のないまま施設へ入所させられたことに納得がいかず、話し合いの末、夏子と元の家へ戻ってきた。独り言を話し、意思の疎通がとれず、家事もできなくなってしまった夏子と中学1年生のゆりの生活は大変なことも多かったが、周りの人達の支えもあり、中学3年間をどうにか乗り切ることができた。中学を卒業後は、給食会社で調理補助として働きながら定時制高校へ通う進路を選択し、仕事と勉強の両立にもようやく慣れてきた。ここ1年ほどで夏子は病院や福祉作業所に通うようになり、独り言は徐々に減り、会話のやり取りも違和感なくできるようになってきた。自

分で薬の管理をしたり、ゆりに晩御飯のおかずを用意してくれることも増えてきた。

「……もう捨てたらいいんと違う？ これとか」

ゆりは、椅子の上から紙の束を片手でつかめるだけつかんで、その多さを強調したかったが、夏子からは、はっきりと聞こえるような返事が返ってこない。頬を伝ってきた汗が、勢いよく床に向かって落ちたのを感じる。

「こんなにいる？」

返事はない。

「紙だらけやん」

夏子は自分の身のまわりの片づけはできるようになった。ごみの捨て方など、几帳面すぎると感じるほどだ。しかし、祖父と祖母の遺した物には手を付けないままだ。折り目や破れがあっても、使いきるとい意志の感じられるデパートの包装紙も、特大から手のひらサイズまで揃えられた紙袋も、天袋の半分以上使って、ひしめき合っている。夏子は見ないふりをしているように感じる。片付けたくないのかもしれない。片付けると、何かが壊れてしまうように感じているのだろうか。

「あー、なんでこんなに奥に入ってしまったんやろう」

孫の手を持った手を伸ばしても、あと 10 センチは奥行きがある天袋。奥の方には、1 度も開けたのを見たことがない箱が 4 つ積んである。

孫の手で電球が入った箱の右側を引っかく。うまくしないと、箱はさらに奥へ行ってしまうようになる。さっきよりも孫の手と箱の動きをよく見ながらゆっくりと動かす。また汗がじわりと背中に浮いてくる。椅子の上で背伸びをして、左手は天袋の棧にしがみつ、右手で孫の手を奥に突っ込んでいる姿勢がきつい。あごを上げた格好でいると、首の後ろ側がつりそうになる。

「……清掃員が……」

「……えー？」

なんか、清掃員がどうのって聞こえた。大事なこと？ 今、大変な時やのに。夏子は相手の状況など気にしないように思う。思ったことを、思った時に口にして。そんなことを考えていると、頭の奥が熱くなる。気を遣うことが苦手なんだろうか。また汗が一滴、こめかみから落ちたのを感じる。今、大変やから、後にして、ってわざわざ言わないといけないの？ いま、大変な状態やんって、見たらわかるやんって言いたくなる。

「あっ」

孫の手がうまく箱の右の脇に引っかかった。そこから、するすると箱がゆりの手元に近づいてきた。

「はあー……」

椅子の上で箱を抱えたゆりは、宇宙飛行から帰ってきたパイロットのような誇らしい気持ちで床に降り立った。頭の重さが一気に肩にのしかかる。

「近くのビルで、清掃員が募集されてたのよ」

眼鏡の奥の瞳がまっすぐにゆりを見ている。

「それで？」

「やってみようと思って」

大丈夫？ やめといたら……という言葉は、お姫さまのような目に吸い取られた。

「そうなんや」

ゆりが知っている夏子の仕事姿は、自宅の一室で近所のお兄さんやお姉さんに英語を教えている姿だけだ。ゆりは自分の仕事場のことを思い浮かべた。様々な年代。性格の人、家の状況も全く違う人と協力して働いている。夏子よりもずっと年上のおばちゃんやおじちゃんにきついことを言われることもある。自分で気をまわして、次々と仕事を段取りしていかないと、迷惑をかけてしまうことだってある。ずっと家で英語塾の先生をしていた夏子が、ビルの掃除の仕事をこなしている姿がどうしても思い浮かばない。考えながら天袋の戸を閉めようと顔を上げると、時計の針が見えた。

「お薬飲んだ？ もう 11 時やし、寝たら」

「明日、面接に行ってみるわね」

相談というよりも、もう決まっているようだった。



「今日は漬けもんと balan もって、次から。8 時で抜けるさかい」

松田さんが両手を忙しく動かしながら体を左に寄せて、ゆりの入るスペースを作った。ゆりは前に置かれた番重から左手で balan、右手で漬物をつかむ。視線をコンベアーで流れてくる弁当箱に落とし、松田さんが入れていた balan と漬物の場所を見る。漬物の汁気が多くて、手袋の中までしみ込んできそうな気がする。松田さんがコンベアーから抜けるタイミングに合わせてうまくしないと、いったんコンベアーを止めてもらわないといけなくなる。

「おはよう、ゆり」

少し流れに乗ってきたところで、ゆりの左で声がした。手元しか見えていないけれど、左でオムレットと肉団子を入れていたのは栄養士の加奈子さんだとわかった。白衣を着てマスクをし、髪の毛まで隠れるネット付きの帽子をかぶっていると、茶髪でパーマのかかったふんわりヘアも、真っ赤な口紅も見えなくて誰だかわからない。

「おはようございます」

いつもは事務所で献立を考えている加奈子さんがコンベアーの手伝いに入らないといけないということは、今日は人手がたりないようだった。

「うちのお母さん、清掃員の仕事するとか言って、今日面接に行ってくるって」

おかずを弁当箱に盛り付けながら、なんとなく加奈子さんに聞いてもらいたくなった。

「お母さん、今年いくつやったっけ？」

ゆりより 10 歳ほど年上の加奈子さんなら、違う答えを持っているかもしれない。

「48 歳」

「それはまだ働きたいんと違うかな」

「でも、病気やし、できるんかな……」

英語を教えるのとは違う。独り言もなくなりコミュニケーションをとることができるようになって、人に気を遣うことが全くないように思う。

「自分のことだけでも大変そうやのに、人のことまでできるんかな」

「仕事になると、また違うかもよ」

「人の思いとか心は見えてないのに。周りの人が気を遣って、動いてくれてるのに、なんにも気にしてないし」

「お母さん、昔、アメリカに留学してたんやんね？」

「そうきいてる」

「日本と全然違うやん。アメリカでは、してほしいこともハッキリ言うし。日本人の『察して』っていうのがお母さんには合わんのとちゃう？」

「そうなんかな」

日本では、気を遣えない人を空気の読めない人とか言って、非難されることがある。周りが習慣で気を遣ってしまっていて、その結果、気を遣わずにいる人が面倒なことから免れたり、要望が通ったりする。

「そんなん、お姫さまみたいや……」

ゆりは、仕事の話をしてきた時の夏子の瞳を思い浮かべた。きらきらとして、別の世界にいるような。周りが気を遣ってくれていても、そんなこと気にしないような瞳。

「それで通る社会だってあるねんって」

目の前に流れてくる弁当箱を見る視界の端に、加奈子さんの手が動いているのが見える。お姫さまばかりいる社会って、ケンカにならないのかな。羨ましいような気もするけれど、気を遣い合って生活している方が、なんだか落ち着く気がする。

「お母さん、せっかく働く気になってるねんから、応援してあげたら？」

加奈子さんの両手が、弁当箱に向かって優しく動くのが見えた。

ゆりが仕事と学校を終えて帰ると、夏子が待ち構えていたような様子で、「明日から仕事」と話した。

「今日面接で？ もう？ 早くない？」

「人が足りないみたいで、すぐ決まったのよ」

夏子の声が、いつもより高い音程に感じる。

「誰か、教えてくれるん？ 仕事のやり方」

「明日は1日、教えてくれるって言ってたよ」

夏子は新しい仕事の時、メモを取るとか教わってないよなあと思ふ。ゆりは、仕事に入りたての頃、覚えることが多すぎて「メモを取りなさい」と先輩に教えてもらったことを思い出した。

「じゃあ、もうお薬飲んだから、寝るわね」

夏子が電気を消そうと、照明の紐に手を伸ばした。明日、王子さまと逢えるとでも言いた

そんな夏子の背中を見つめる。



今日はいつもより 10 分ほど早く家を出た。夏子も早起きしていたようだった。ゆりが家を出る 7 時ごろには、夏子が仕事に持っていくと思われるカバンが玄関に準備してあった。今日は駅まで、いつもと違う道を通って行こうと、家を出て逆方向に足を進める。ゆりが駅に向かう途中で、左手の方に黄色いひまわりが目に飛び込んできた。

「おはようさん」

声の方に顔を向けると、ブロック塀の向こうで中野さんの麦わら帽子が揺れるのが見えた。

「おばちゃん、おはようございます」

「ちょうど、あんたのところに持って行こう思ってたんよ。これな、高知の親戚が送ってきたんよ。あんたのおばあちゃんが好きやったやろ。帰ったら、供えたって」

中野さんが玄関の方にまわり、段ボール箱から何か取り出して紙袋に入れた。ゆりが受け取ったその袋をのぞくと、透明のパッケージに「いもけんぴ」と書かれたシールが貼ってある。

「ありがとう、うん。好きやった。固くて歯が欠けへんか心配やったわ」

中野さんは、ははっと笑った。笑うと目の横のしわが一層くっきりと見える。

「おばちゃんな、俳句で賞もらってん。今から仕事か？ 電車、大丈夫か？」

「あと 2, 3 分やったら大丈夫やけど」

「ちょっと待とって」

おばちゃんは、脱いだサンダルが裏返っているのも直さずに、中に入っていった。

「これこれ、これもおばあちゃんに見せたって。返さんでいいから」

頬を伝う汗もそのまま、中野さんがコピー用紙を差し出した。そこには、10 句ほどの俳句が並んでいる。

「おばちゃんの俳号は『中野鈴花』や。夏の風情を詠んだんや。あとで電車で見て」

佳作と書かれた見出しの下に鈴花の俳句があった。

「この賞、もらうまでに、こんなに作とったんやで」

中野さんは、表紙に『俳句帳』と書かれたノートのページをめくって見せた。50 ページほどありそんなノートいっぱい、文字が並んでいるのが見えた。

「そんないっぱい作ってたんやね」

「これは、あんたのお母さんを詠んだ」

おばちゃんがページをめくり、左の方を指さした。俳句って、人のことも詠めるのか。今までに習った俳句は、季節とか風景のことばかり詠んでいたものだった気がする。

「へえー、すごいね」

夏子を詠んだという一行に目を落としていたゆりの耳に、小さく踏切の音が聞こえた。

「あっ、もう行くわ、おばちゃん」

ゆりはもらった袋とコピー用紙をつかんだまま、駅までの坂を駆け下りた。走りながら、鈴花のノートにあった夏子を詠んだ俳句の『孤高の人』という言葉を考えていた。夏子が孤高の人？ 孤独の『孤』と『高』いという漢字。“ここう”で合ってるのかな、わからない。意味は？ ゆりは電車に乗り込むと手帳を取り出し、後ろの方にあるメモのページに『孤高』と書いた。



夜 10 時ごろゆりが家に帰ると、夏子の部屋の電気は消えていた。今日、ちゃんと仕事を教わって来られたのだろうか。聞いたかったけれど、疲れているのもわかる。ゆりは、自分が給食会社に入社したころ、しばらくは体も心も疲れていて、学校で居眠りばかりしていたことを思い出した。

朝、起きるとゆっくり話そうと思っていたけれど、ゆりが起きたのが遅かった。目が覚めて時計を見ると、仕事に出発するまで 30 分しかなかった。慌てて起き、昨日のことを早口で訊いた。夏子は、担当のビルで掃除方法を詳しく教わってきたようだった。今日はお昼から仕事で、昨日教わったことをひとりでするのだと言っていた。ゆりは、今日は土曜日やから仕事も昼まで、とだけ伝えて急いで家を出た。



「ただいまあ」

玄関のドアを開けても、いつもの場所に夏子の靴がなかった。

「あ、そっか、仕事か」

今日はすぐ帰るんなら傷まんし、持って帰りと言われて貰ってきた給食のおかずの余分を夏子と一緒に食べるつもりだった。おかずの入った弁当箱を 2 つ、テーブルに置こうと台所の戸を開けると、留守番電話のボタンが点滅しているのが目に入った。ゆりは鼻歌を歌いながら、ボタンを押した。

「吉田さんですか？ お母さんのことで。聞かれたらすぐに、今から言う番号にお電話もらえますか……」

男の人の声が、静かな台所に響いた。喉の奥が狭くなったみたいに、吐く息が出てこない。ゆりはすぐに受話器を取り、電話をかけた。

「実は……今日、仕事に来てくれていたんですけど、伝えてあった鍵の場所がわからなくなっただけで、仕事ができなかったようなんです」

鍵の場所がわからない？ どうして？

「それで、母は今、どうしていますか？」

「仕事にならないので、今日は帰ってもらいます。これではこの仕事、続けてもらうのは難しいです」

それはそうだと思う。受話器を置いたゆりは、玄関で夏子が帰ってくるのを待った。帰ってきた夏子は、そのまま自分の部屋に向かい、ベッドに腰かけた。

「どうしたん？ 会社の人から、電話あったよ」

顔色がよくないし、視線が下に行ったきりだ。

「しんどくて、頭がぼーっとして。声が聞こえてくるのよ」

声が聞こえるという言葉で、なんとなく何が起きたのかがわかるような気がした。また、あの時みたいになってしまったの？ どうして？

「鍵の場所もわからなかったって」

「ううん、違う」

視線が合わない。その返事は、ゆりに向かって発せられたものではない気がした。背中から首の裏側にかけて、さざ波のような震えが伝わってきたのを感じた。

「……病院いく？ 今日土曜日か」

もう閉まっている。月曜日まで、家で様子を見るしかない。

……せっかく、お姫さまやったのに。

(後編につづく)

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。